（第４期：2017, 18, 19 年度）

2017 年度外部評価委員会（第 4 期）議事録

日　　時　2018 年 3 月 22 日（木）18 時 30 分～20 時 30 分
場　　所　本館 2 階大会議室
委員出席　比嘉康春（委員長）、越野泰成（副委員長）、石原地江、平良肇、松永勝利
本学出席　仲地博（学長）、山代寛（副学長）、西泉（副学長）、吉本篤人（教務部長）、島袋隆志（学生部長）、小野啓子（法経学部長）、長濱正弘（理事長）、佐喜真實（常務理事）、田代真紀（総務課長）、金城直樹（経営企画室長）
委任欠席　王志英（人文学部長）、森田泰弘（事務局長）
配付資料　2017 年度外部評価委員会（説明資料）
別紙１　第四次中長期経営計画
別紙２　進捗シート
別紙３　基本戦略に係る評価指標及び進捗状況
別紙４　大学基準協会資料（「大学評価ハンドブック」より抜粋）

開会に先立ち、仲地博学長より沖縄大学外部評価委員（第 4 期）委嘱状が交付された後、司会の山代寛副学長が開会を宣言した。

1　開会挨拶

仲地博学長は冒頭で、沖縄大学の教育成果が好調である状況について、法経学科のゼミで発刊し 6 千部を売り上げた『沖縄の業界地図』、二桁の現役合格者を出した教員採用試験、3 人の現役合格者を出した行政書士試験を例に挙げ、これらの成果を一過性に終わらせないためにも自己点検・評価とそれに対する外部評価は重要な取組であると述べた。

続いて、本学の中長期経営計画における基本戦略に触れ、学生を大切にする教育中心の計画としていることや、PDCA サイクルを回すことによって教育の成果を定着させようとしていることを説明し、今期の外部評価委員会ではそうした PDCA サイクルの取組についての助言もいただきたいと述べた。

最後に、各委員に対して、県立芸術大学の教学に係る最高責任者である比嘉康春委員には教育・研究についてのご助言を、琉球大学の評価活動に長年携わってこられた越野泰成委員には本学の PDCA サイクルについてのご助言を、中小企業家同友会の石原地江委員には大学と企業との連携、就職、国際交流についてのご助言を、地域の方として長年本学と関わってこられた平良肇委員には沖縄大学の地域共創の在り方や地域との関わり方についてのご助言を、新聞社の松永勝利委員には社会における沖縄大学の役割について大所高所からご助言を賜りたいと述べつつ、「学長は我々にこんなことも期待しているのか」という程度に受け止めていただいて自由闊達なご意見をお聞かせ願いたいと結んだ。

挨拶の後に、沖縄大学側の出席者を紹介した。

２ 委員自己紹介

（松永勝利委員）

・東京出身、中央卸売市場の仲買人のせがれで、高校時代は進学する意思はなく、オートバイで日本中を旅していた。卒業後は東京を出て就職をしようと思っていたら、当時沖縄大学は東京で受験することができ、しかも面接と小論文だけだったので、東京を出て暮らしたいという目的に少し近いこともあり、１９８４年に沖縄大学へ入学した。

・在学中の４年間でいろいろなことを学んだ。山門健一先生のゼミで教わった。３年次の時には東京大学から宇井純先生が来られた。正月にはご自宅で御節料理をご馳走になったり、むしろ教室の外でいろいろなことを教えていただいた。

・３年次で受講した集中講義「ジャーナリズム講座」がきっかけで琉球新報に入社することになった。

・沖大を卒業し今年で３０年になる。沖縄大学というのは私の人生の進むべき道を明確にしてくれた。沖縄大学は通過点ではなく分岐点だったと思っている。

（越野泰成委員）

・琉球大学法文学部に所属し、大学評価センターと IR 推進センターを昨年度に合併した大学評価 IR マネジメントセンターで副センター長をしている。

・10 年ほど前、国立大学が法人化し外部評価が高等教育機関でもおこなわれるようになった頃から大学評価の仕事を併任している。

・そのきっかけをつくっていただいたのは貴大学の仲地学長で、私共の法文学部の学部長をされていた時に声をかけていただいた。今回仲地先生にお声をかけていただいたことをうれしく思っている。

（比嘉康春委員）

・県立芸大は今年で 32 年目を迎える。30 周年の際に基本計画、中期目標を策定し PDCA サイクルを回している。

・3 年後には本学も法人化を迎えるので、今回は勉強するつもりでもいる。仲地学長のお声かけに応えていきたい。

（石原地江委員）

・沖縄県中小企業家同友会の副代表理事をしており、派遣された。同友会は約 1,170 社の中小企業が在席し、元気な社長たちが活発に活動している。

・沖縄大学とは包括連携協定を締結しており、少しずつ学の力を借りながら中小企業の経営環境の改善を進めている。

・個人としてはアメリカの大学で 4 年間学んだこともあり、そうしたことから気付いたことがあれば発言したい。

（平良肇委員）

・寄宮十字路通り会と寄宮自治会を結成し、地域活動等をおこなってきた。沖縄大学とは、2001 年に山門健一先生とムイクワ（ジャスミン）で香りのまちづくりを一緒にやった。最近は展望が見えていないが、またまちづくりをやっていきたい。

・寄宮に住んで 65 年になる。かつて父親が本屋を営んでいたことから地域とのつながりがあり、沖大との距離も近かった。当時は地域の人たちが沖大祭を楽しみにしていた。

・今の沖縄大学はどういう所なのか、地元の人は意外に知らないということもあるので、沖大と地元の人たちのコミュニケーションを図っていきたいと思っている。

3　委員長選出及び副委員長指名

互選による選出はなく、比嘉康春委員に委員長を担っていただきたいとする事務局案が異議なく了承された。続いて、比嘉委員長により、越野泰成委員が副委員長に指名された。

4　内部質保証体制について

経営企画室より、はじめに内部質保証について下記２点の確認がなされた。

①内部質保証システムの必要性について、大学基準協会が規定している下記の文章を確認。

「高等教育機関としての質を確実に保証するために、各大学には自己点検・評価を改革・改善につなげる内部質保証システムの構築が求められている」

②内部質保証の定義について、大学基準協会が規定している下記の文章を確認。

「PDCA サイクル等を適切に機能させることによって、質の向上を図り、教育、学習等が適切な水準にあることを大学自らの責任で説明し証明していく学内の恒常的・継続的プロセスである」

次に、資料 4-1「自己点検・評価」に基づき下記２点の説明がなされた。

①本学の自己点検・評価による内部質保証体制のイメージについて（図１）。

・最上位に沖縄大学憲章「地域共創・未来共創の大学へ」があり、その下に教育についての「３つの方針」及び大学運営等の「8 つの方針」等がある。

・それらのステートメントの下に、学長を委員長とする中長期経営計画・自己点検運営委員会がボトムアップで第四次中長期経営計画を策定し（P)、進捗状況を確認し（C)、見直しをする（A）という全学的な PDCA サイクルを回している。

・この中長期経営計画は「大学基準」と「基本戦略」の 2 本柱でなり、それらの進捗状況の確認作業は、自己点検・評価となる。

・本学の内部質保証体制は、この自己点検・評価を起点とした PDCA サイクルをめざしており、このサイクルに本外部評価委員会も位置づけられている。

・今後「内部質保証の方針及び手続」を整え、それに基づいた PDCA サイクルによる内部質保証を目指していくことになる。

②本学のこれまでの自己点検・評価について（図２）。

・本学は 2012 年度に自己点検・評価報告書を作成し、翌 13 年度に 7 年に 1 回の大学認証評価を受審した。

・大学認証評価の結果は、第四次中長期経営計画の一つの柱である 10 の大学基準への取り組みとして反映した。もう一つの柱である 5 つの基本戦略は、第三次中長期経営計画の総括を受け、第四次に引き継がれた取り組みである。

・規程では、本学の自己点検・評価は中長期経営計画の終了年度に行うとされており、第四次が終了する今年度は自己点検・評価を行う年である。

・第四次中長期経営計画ではその進捗管理として、毎年前期・後期の２回「基本戦略」

を中心とした自己点検・評価をおこなってきた。

・しかし、「恒常的・継続的」な自己点検・評価のためには、中長期経営計画の終了時だけの自己点検・評価ではなく、「大学基準」及び「基本戦略」双方の自己点検・評価を毎年行うことが必要ではないかと検討している。

次に、資料 4-2「第四次中長期経営計画の概要」に基づいた説明がなされ、質疑応答がおこなわれた。

5 沖縄大学外部評価委員会について

経営企画室より、資料 5-1「本委員会の役割」、資料 5-2「委員会の主要テーマ」に基づき説明がおこなわれた。

6 現状と今後の主要課題について

仲地博学長より、資料 6-1「第四次中長期経営計画の実施状況」、資料 6-2「主要課題」に基づいた説明がなされ、質疑応答がおこなわれた。

7 意見交換

（石原委員）

・中小企業が合同企業説明会などを開いても学生が集まらない。高い就職率となっているが、正社員の就職率は高いとはいえない。就職の質を上げる取組みやキャリア教育について同友会で協力できることはないだろうか。

（島袋学生部長）

・にわかに経済状況が良くなっているが、数年前まで就職氷河期と言われる状況が長く続いた。企業の慣行として試用期間の代わりに契約社員として採用することがあった。非正規の就職率が高いのはそうしたこともあったと思う。

・就職率には反映しないが、家計の状況がいい学生は公務員を志望し就職浪人することもある。

・今年あたりから一人の学生に対して内定が複数社出る場合も出ており、学生が会社を選ぶということがある。本土に就職するという選択肢も増えたことで、本土へ行く敷居も下がり自分のキャリアに向き合うということも少しずつ浸透してきたと思う。

（比嘉委員長）

・就職希望者ではなく、卒業生を分母にするとどれくらいの就職率になるか。

（島袋学生部長）

・まだ把握できていない。

（小野学生部長）

・法経学部は定員 230 人のうち今年度の卒業生は 154 人だった。

・学部長になって 3 年目、学部改革に関わって来た。この間、入学者が 200 人を切ったこともあったが昨年は 247 人だった。今年は入学定員ぎりぎりと思う。学部改革の成果と言いたいところだが、要因ははっきりわからない。

・沖大に勤めて 15 年になるが、沖縄大学は沖縄社会の中間層が入学してくるというイメージ

だ。もともと学力は高いほうではなかったが、この間にユニバーサル化が進んだ。法律経済分野は、琉大の法文学部、沖国、・・と輪切りにしてみることができる。本土の大学への進学者も多く、沖大へ入学してくる層は松永さんの頃とは違ってきている。

・法経学部が競合するのは専門学校だ。この層に沖大をどのようにアピールできるのかということが重要だ。キャリア基礎をしっかり築き社会人になるための最低限のブリッジとなることが課題だ。

・また、法経学部は女子学生が圧倒的に少ない。女子学生を増やすことが最大の課題だ。女子が一生働くための基礎を大学で身に付けることを入試戦略としている。

（石原委員）

・仕事を探している女性は多い。手に職をつけたいとか接客業に就きたいというより、子育てや主婦をしながら働ける事務職がいま人気だ。しかし PC スキルがなかったりする。

（小野学生部長）

・社会人の再教育については、定年後に沖縄のことを学びたいという方々もいるが、例えば一度キャリアを中断したけれど再就職を希望するという社会のニーズに対応することも考えている。

（石原委員）

・大学には多様な学生がいることが大事だと思う。自分と異なる他者と交わるという経験は貴重だ。沖縄へ語学留学でやってくるネパール人やベトナム人は年々増えている。そうした留学生が沖縄大学へ進学するような取組みも考えられるだろうか。

（西副学長）

・留学生別科が廃止となり、留学生の主な受入れ口となっていた国際コミュニケーション学科の留学生は少なくなってきた。仲地学長も学生の多様化と言っておられるので、課題としたい。

（平良委員）

・沖縄大学留学生友好の家をつくりたいと思っている。高校生の時に初めて中国を訪れたが、4 年前から中国語を学んだり中国を訪問したりしている。若い頃の体験はその人の意識の古い層をつくると言われている。私の経験からも、学生には留学生と多いに交流してもらい、英語や中国語といったコミュニケーションツールを学んでほしい。

・沖大が発行している広報誌を地元に配ったりしているが、沖大は意外にも外からよく見えない。地元と沖大をつなぐコミュニケーションの手伝いをしたいという思いで、以前、仮称だが「沖縄大学内外通信」を一緒につくりたいと考えたこともあった。そういうことを通じて、地元の人たちに自分たちの大学だという意識が出てくればと思う。

・寄宮中や真和志小の学校評議員もしているので、こどもたちに沖大のことを伝えたいし、地域のイベントに沖大生を誘うことも手掛けてみたい。

（越野委員）

・評価方法について感想を述べたい。個人的によくできていると思った。大学が進んでいく方向をより明確に評価をするためには、エビデンスとなるデータを示すことが必要だ。今回説明いただいた資料は数値化され見やすくできているので非常に良い方法だと思う。

・特に進捗シートは細かく書かれており、その裏ではエビデンスとなる資料を検討されたと想

像する。

・次期第五次計画でも、今回の評価方法をうまく生かしていただければと思う。特に、仲地学長の資料 3 の説明にあったように、「施策効果」の「C」「D」については、その見直し策を Action ということで第五次計画に反映させれば、5～6 年の PDCA サイクルを回すということにもなる。そういう意味で Action につなぎやすい方法になっていると思う。

・目標を達成するための評価指標も設定されているが、第五次に向けてはその指標の意味をもう少し明確にしたほうがいい。例えば学生満足度を数値化しているが、次は満足度を数値化するだけでなくそれがどういう意味を持つのか検討するべきだろう。

・教学 IR の面から直接評価することも重要だろう。GPA の平均値をどこに置くのかということも重要で、高すぎると成績評価が甘いと捉えられる。

・学位授与率については、4 年間の修学年度で卒業率を出すのが普通だが、標準修業年限プラス 2 年の 6 年間で卒業率を出すという指標を用意することも考えられる。

・指標をもう少し生かす形で第五次計画に向かっていただければ、非常に良い評価となるだろう。

（松永委員）

・私が沖大生だった頃は自由にいろいろなことをさせてもらい、とても楽しいことが多かった。最近の様子を見ると、あまり学生が声を上げて笑ったりにぎやかな感じがしなくて、殺風景な感じがするのは少し残念だと思う。もしかすると管理が必要な時代の影響かもしれない。

・以前はいろんな人が勝手なことをやっていた。私も炊事場を使って、一斗缶に苛性ソーダを入れて廃油石鹸を作ったりしていたが誰も文句を言わなかった。自由な雰囲気があった。

・このような計画を作る時に、今の学生がどういうことを大学に望んでいるのかを聞くような仕組みが必要かと思う。私も社内の若い記者がどのような要望を持っているのか無記名で集めてみたら、こんなことで悩んでいるのかということが沢山出てきて、自分の価値観と違うことで悩んでいたり苦しんでいたりしていることに驚き、今それを改善する委員会をつくっている。学生が大学に魅力を感じるかということを考えるなら、学生がどのようなことを考え、望んでいるのか、我々よりも学生の気持ちを聞いていただければと思った。

8 コメント

（仲地学長）

・それぞれ参考になり、ありがたく思う。

・平良委員のおっしゃるように、沖大が地域とどのように密着することができるかということは重要だ。沖大は国場にあり、那覇市にある。沖縄にあるというと少し広くなる。地元との関係を大切にするということは加藤前学長もおっしゃっていた。

・石原委員のおっしゃるように、企業や経済界とどのように連携していけるかということは沖大の課題だ。留学生をどのようにして確保するかということも重要な課題だ。

・越野委員のご助言も大変参考になる。後で起こした文章を熟読したい。

・松永委員のおっしゃるように、学生が賑やかではないというのは、確かに今の学生は群れたがらない。よく言えば確立していると言えるが、昔の学生の溌剌とした雰囲気を取り戻すということも教育の課題だ。やはり、人がいて、友人がいてこそ学校だ。人が集まる大学を創

る。そのためには課外教育も重要で、1 号館を課外活動の部室に作り替えた。学生の意見を聞く仕組みということも参考にしたい。学生アンケートや授業評価アンケートを取ってはいるが、大学全体に対することや学生生活についての悩みや期待や希望や不満といった観点から見直してみたい。

（長濱理事長）

・第 4 期の外部評価委員会となるが、これまでの委員会でも非常に示唆に富んだご意見をいただき、参考にさせていただいた。
・第三次中長期経営計画までは数値目標を設定していなかったが、第四次からは数値目標を入れた。数字はうそをつかない。どうしたら目標を達成できるのかを考えるためにも数字は必要だ。この 4 年間で数値化は定着してきた。
・これまで中長期経営計画という名称でやってきたが、実際は中期経営計画だ。今年は創立 60 周年ということで、70 周年にはどういう大学を目指すか 10 年後のビジョンを創ることにした。そのためには、内部の教職員や学生、外部の企業や同窓生の意見を聞いて参考にしていこうという作業をしている。
・そうした作業を一つひとつ積み重ねていくことによって、社会のニーズに合った大学になっていくのではないかという信念のもとにやっていきたい。
・私は常々、卒業生が誇りの持てる大学にしていきたいと思っている。そのためには、現役の学生が一生懸命やらなければならない。
・経営者としては、沖縄大学をいかに存続させ卒業生が誇れる大学にするかということだ。そのためにはしっかり教育をやり、学生をどう成長させるかだ。それを見ている高校が沖縄大学に生徒を送ろうという循環になる。その結果大学の経営が良くなり、設備も充実し、新しい教育ができる。金がなければ何にもできないというのが正直なところだ。
・委員の先生方に聞かせていただいたご意見を大切にし、努力をしていきたい。

（記録：後藤）